

聴覚障害者・児の対面コミュニケーションと社会関係

：「状況定義」を活かした支援技術とノウハウ

The "definition of situation" software for communication and social relationship to persons with hard of hearing

柴田 邦臣†

Kuniomi Shibata

1. 本報告の課題

聴覚障害者・難聴者の対面的コミュニケーションは、特に手話を共有していない場合や難聴児である場合において、いくつもの問題に直面する。その克服の困難さが、社会関係形成に影響を与えているとも考えられる。本稿は、そのような対面的コミュニケーションにおいて、“状況定義”概念を導入し、その相互行為を支えるような支援技術の応用を試みる。具体的には、障害児の言語や知識取得の場面に焦点をあて、その中で「状況定義」行為を支えるメディア、タブレットアプリを導入し、その効果を検証するとともに、必要な知識・ノウハウを整理する。それによって、実践的な貢献とともに、社会的な課題についても議論することが、本報告の課題である。

2. 問題構造の把握—聴覚障害児・者の言語習得と社会関係の構築

聴覚障害は、2つの意味で“見えにくい”。

まず、障害があるということが社会的に“見えにくい”。障害者が「差別」される理由は、そのわかりやすい「社会的不利」にある。しかし、肢体不自由や視覚障害とはことなり、その不利と支援の必要性は一見してわかるわけではない。そのために社会的サポートが欠けているという点で、“見えにくい”障害となっている。

実は、この“見えにくさ”は、本人・家族の側からもういうことができる。例えば「聞き間違い」は、多くの人が経験したことがあるだろう。聞き間違いの重要な点は、正解を確認できる機会がなければ、本人は間違えていることに気づきようがない、という点である。聴覚に障害がある場合、このような「聞き間違い」が日常的に繰り返していることになる。これこそが、「聴覚障害はコミュニケーション障害だ」といわれる、典型的な理由であるといえるかもしれない。

重要なのは、聴覚に障害がある場合、このような「聞き間違い」とコミュニケーションの問題が、出発点である言語取得の段階から続いているという点である。そのため、聴覚障害という問題系は、単に「聞こえればよい」「そのための代替手段があればよい」といいのではなく、言語取得、コミュニケーション、そして社会関係構築にわたった、“見えにく”くわかりにくい課題の積層として、把握され直されなければならない。

3. 「状況定義」を活用した言語習得・コミュニケーションのためのアプリの開発

3.1 理論的背景—舞台装置と「状況定義」

(1) 「まだらな理解」

“見えにくい”聴覚障害の特徴は、このような「ある程度は聞き取れていたり、伝わってはいるものの、わかりにくいままである」という点にある。このような状態は、“まだらな理解”と再定義し呼称すると、わかりやすくなるだろう。

人間の理解は、0 か 100 か、ということはない。わかったところもあるし、わからなかったところもあるだろう。私たちはそれを足し合わせて理解している。聴力もまた、0 か 100 かということはない。「聴こえはしたものの、聞き取りにくかった」ということは多く、その伝わり方は本質的に“まだら”である。通常、十分伝達されなかった情報は繰り返されたり、後で補われたりしてコミュニケーションが完成していく。しかし聴覚障害者は、常にその“まだら”な状態にさらされていることになる。

より重要なのは、そのような“まだらな理解”の状態が、日常になってしまうことが多い点である。これまで補聴器とリップリーディング（読唇）とをフル活用して高校を卒業し、大学に入学してきた学生に、はじめて教員の音声をノートに書き留めてくれる「ノートテイク」のボランティアがついて、「自分がこれまで、30%ぐらいしか聞き取れていなかったことがわかった」と驚いた人がいるという調査結果も参観されている¹⁾。このように難聴であったり、聴覚障害者であったりしたばあい、自らが“まだらな理解”であることに気がつかなかったり、かりに気づいても、どこが“まだら”なのかわからなかったりする。そうではない人には極めて不可視な“まだらな理解”こそが、聴覚障害者・児の言語取得やコミュニケーションに影響を与えているといえるだろう。

(2) コミュニケーションと「状況定義」

このような“まだらな理解”の克服可能性は、それが起こる状況を理論的に考察してみると、わかるようになるだろう。

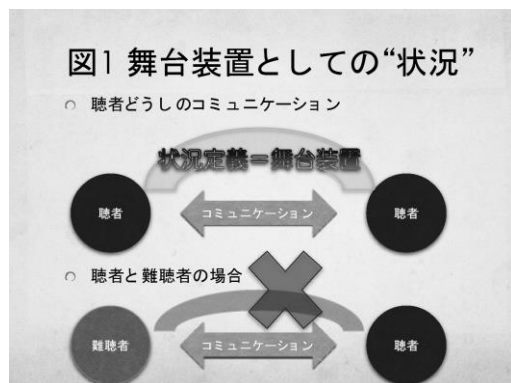
私たちがコミュニケーションを試みる場合、そこには必ず前提となるものが存在している。

Erving Goffman は、コミュニケーションの相互行為の中に「状況定義」(definition of situation)という概念を導入した²⁾。

† 大妻女子大学, Otsuma Women's University

この報告の関心事は、社会的出会いの構造——社会生活において、人びとが互いに直接肉体をもった者として人前にでたときに存在し始めるようなさまざまな事象の構造——である。この構造の核心的因子は、状況に関して単一の定義を維持すること、すなわちこのような定義は表出されねばならず、またこのような定義は無数の潜在的攪乱のただなかで維持されねばならない、ということである。(pp.300-301)

これは、図 1 のような「コミュニケーションの土台を設定する」という感覚に近い。状況(Situation)が定義されることによって初めて私たちは、他者とコミュニケーションすることができ、それが維持されてやっと、相互行為をな



りたせることができるのである。

ゴフマンに言わせれば、一部しか理解できておらず、しかもどこが理解できてどこが理解できていないか自分では認識できていないという“まだらな理解”は、状況定義の面で相当な危機に陥っている状態だといえる。ということは、例えば図 2 のような、「状況定義」をアシストするテクノロジーが存在すれば、“まだらな理解”下に留められかねない人にとって、極めて有用なものとなるであろう。



3.2 アプリの開発

“まだらな理解”が「状況定義」の問題であるのであれば、聴覚障害者のコミュニケーションを支えるために、無理に高度な翻訳機など用意する必要はなく、むしろ“写真1枚、文字一行あれば、事足りる”といえるかもしれない。「状況定義のための舞台設定」をサポートするようなアプリは、「臨機応変な紙芝居」として、具体的な形を与えられるだろう。

その特徴は、以下に整理される。

(1) 対面的な生活場面で使用できる

Android 上で起動するアプリとして設計することとした。タブレットを想定することで、Augmentative and Alternative Communication: AACデバイスに近い利用イメージとなるが、発話を手助けする AACデバイスと、聞き取りを手助けする本アプリとは、似て非なるものとなる。

(2) 状況にあわせた表示ができる

リアルタイムでコミュニケーションを切り取ることができるよう、Android の音声認識(RECOGNIZE_SPEECH)を搭載することとする。

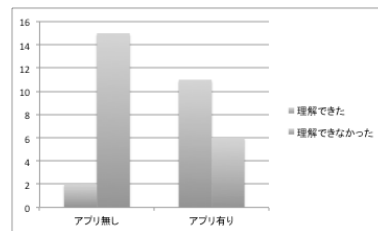
(3) 状況に働きかける画像を表示できる

動画ではなく、コミュニケーションの場面を説明するために、話者がピクトを表示できるようなアプリとした。イメージは、今回のテストに該当する聴覚障害児の教育場面において頻度が高いものに限定した。

3.3 アプリの試用と検証

以上のように試作したアプリについて、聴覚障害をもつ親子、および対照例として聴覚障害はないが、音声情報をわかりにくくした組み合わせの2例に対して、テストを実施した。

グラフ1 テスト1の結果



テスト 1 の結果は上記のとおりである。他のテストも「アプリ無し」よりも「アプリ有り」の方が成果が確認できた。文字や画像を表示することで、「うまく聞き取れなかったが、今、何を話しているのかについてはわかった」という場面が増加していた。しかし実際には、音声認識と使用環境の双方に依存するため、さらなる考慮が必要といえる。詳細は口頭報告によって補充される。

4. 結論にかえて—豊かな社会関係のために

本アプリをとおして見とおすことができたのは、ちょっとした工夫で、コミュニケーションの「状況定義」を可能にしうるといふ地平である。「見えにくい」聴覚障害を、社会関係の困難としてしまわないために必要なのは、コミュニケーションの前提を問い、それを直接的に支えるような工夫であり、それこそが豊かな社会関係を支える糸口となるのではないか。

参考文献

- 1) Shibata, K., Utagawa, K., Inoue, S., Yoshida, H., Ayuha, D., : Research on The Usefulness of Closed Captions on TV Commercials③, IAUD2012 (2012).
- 2) Goffman, Erving : The Presentation of Self in Everyday Life, Doubleday & Company Inc.(1959).＝石黒 毅 訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』, 誠信書房(1974).